

学界未利用の在東欧・北欧所蔵西域出土文書を用いた、東アジア新古文書学の創造的研究

| | |
|-----|---|
| 著者 | 小口 雅史 |
| ページ | 1-5 |
| 発行年 | 2015-05 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/12555 |

様 式 C - 19、F - 19、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24401026

研究課題名(和文) 学界未利用の在東欧・北欧所蔵西域出土文書を用いた、東アジア新古文書学の創造的研究

研究課題名(英文) A Creative Study for New Paleography in East Asia: Applying Excavated Documents from West China Resident in East and North Europe

研究代表者

小口 雅史(OGUCHI, Masashi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00177198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで存在自体は知られているものの、他の類似のコレクションに比して、これまであまり活用されてこなかった、在北欧・東欧等の吐魯番出土史料について、学際的な新しい手法を用いて、初めて本格的な分析のメスを入れ、その実態の正確な把握、分類と、それに基づく膨大な断片史料の統合によって、各コレクションの相互関係を解明した。また断片統合に際しては、自ら構築した新しいデータベースの利用法を創造し、東アジア世界規模での、新しい史料学ないし古文書学の基盤を築くことができた。

研究成果の概要(英文)：This study elucidated relationships of unearthed documents from Turpan which are resident in East and North Europe and not much utilized comparing with other collections, while their existence has been known: we applied an interdisciplinary and new method to conduct a systematic analysis for the first time and grasped, categorized, and integrated numerous and fragmentary materials. On the occasion of integration of these materials we also devised the way of using of the new database which we have constructed. As a result, we could create a basement for a new science of historical materials or paleography in East Asia.

研究分野：日本古代史、吐魯番学

キーワード：比較史料学 比較歴史学 敦煌出土文書 吐魯番出土文書 断片接続

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの在欧敦煌・吐魯番出土史料の研究は、まとまった文献を多く含むロンドンやパリのコレクションを中心とするものである。一方で多数の断片群からなるベルリンのコレクションについては、断片故の扱いにくさと研究効率の悪さから、これまであまり注目されてこなかった。そのため貴重な史料が未紹介のまま埋もれていることすらあった。そこで本研究グループは、ベルリンの吐魯番出土世俗漢文文献断片群を中心に、それぞれがいかなる典籍類ないし文書類に属するものであるかについて比定研究を続け、その成果を今後の新たな研究素材として学界に提供し続けてきた。こうした調査の過程で、断片といえども、典籍の比定ないし文書の実態が明らかになれば、驚くべき成果をあげることを経験してきた。そうした調査・整理過程において、このベルリンの断片群と密接な関係を持つ断片群が、なお欧州各地のコレクション中に多数存在していることに気が付いた。

(2) 各地の断片群は何らかの形で相互関係を有する可能性等があるので、同一地域出土の断片群は、包括的に比較検討することによってこそ、その学術的価値が大幅に増大する。しかしながらこれらの文書群は、基本的には断片であるために、正当に学界で利用されてきたとは言い難い。これらの断片群の実態の詳細とその相互関係が明らかになれば、ベルリンを中心とした吐魯番出土史料群の総合的分析が可能となり、これまで不明確であった吐魯番地域の社会像の一層の解明が期待される。それに加えて、東アジア古文書学に新たな素材を、しかも同時代の原文書という形で相当量提供できることになり、それによって新たな史料学の構築が可能になるばかりではなく、様々な分野の基礎史料ともなり、その研究発展に寄与できるものと考えた。

2. 研究の目的

まずは、これまで本格的に研究されてこなかった、断片を主体とするベルリンのコレクションを中心とした在東欧・北欧の諸コレクションについて、初めて本格的な調査のメスを入れ、分析のための精密な素材を学界に提供することを目的とする。

今回、調査・整理・研究の対象の中心となるものは、欧州その他の6カ所のコレクションである。一つはヘルシンキの国立図書館(旧ヘルシンキ大学図書館)に架蔵されるもので、マンネルヘイムが、ベルリン・コレクションと同じく吐魯番で収集した史料断片2000点ほどからなっている。二つ目はコペンハーゲンの王立図書館東方部の敦煌文献14点。三つ目は、日本では全く知られていないが、クラクフ市立図書館 BIBLIOTEKA JAGIELLOŃSKA 架蔵の、ベルリン旧蔵典籍群。四つ目はイスタンブール大学図書館所

蔵の吐魯番出土史料(確実にベルリン・コレクションと密接に関わるはず)、そして五つ目は、やはり吐魯番出土史料群であるサンクトペテルブルグの東洋学研究所・エルミタージュ美術館のオルデンブルグコレクションである。またこれらのコレクション(コペンハーゲンを除く)の母体的存在であるベルリン・コレクション(ベルリン国立図書館、ベルリン＝ブランデブルク科学アカデミー、アジア芸術博物館に分蔵)の史料についてもあらためて詳細な補充調査を行う。

それらの調査で収集された高精細画像をもとに、研究代表者・分担者が協力しながらそれぞれの研究拠点で整理分析を進め、正確な目録を作成し、あわせてそれをもとに膨大な各断片ごとの史料性格を確定する。

その上でそれら全体をデジタルデータとして統合し、それに基づいてコレクション相互の関係を探っていく。この作業を繰り返すことによって在東欧・北欧の敦煌・吐魯番出土史料群の全体像を明らかにし、分析のための史料学的方法論を学界に提供する。最終的にはこれは東アジア世界における新しい古文書学の創造につながるものになるはずである。

3. 研究の方法

(1) 在東欧・北欧の敦煌吐魯番史料のコレクションについては、まだ情報が決定的に不足しているので、まずは現地において、その高精度の多面的なデジタル写真撮影による収集を順次行う。あわせて現物に即した詳細な調書作成を進める。その際、資料の真贋判定も綿密に実施する。

(2) 次に、現物に即して正確な釈文を作成する。これは断片の接続関係を復元するために必須の作業である。それをもとに史料比定を実施する。比定が終了した断片については、比定結果をキーとし、それにデジタルテキスト内容を組み合わせて、各コレクション全体にわたる接続調査を実施する。

(3) 次に極小断片などの素材を入手すべく現地で交渉につとめ、ドイツ・ケルン大学(紙質によっては日本の名古屋大学等も利用する)において、AMS 炭素分析を利用して年代比定を試みる。

(4) その上で世俗文献については詳しい総合目録を作成し、仏典については近時世界的規模で整備された大蔵經電子テキスト等の電子媒体を活用しながら目録を整備し、いずれも写真とデジタル・テキストと現地での調書をすべて統合した上で、各地の研究者が相互に自由に検証・利用できるようにデジタル処理を進める。

(5) 最終的には、ベルリン・コレクションを中核とした、これまで軽視されてきた在東欧

欧・北欧の敦煌吐魯番出土史料群の全体像を描き出す。コレクションを超えた断片相互の関係が明らかになれば、これまでほとんど利用されてこなかった小断片に、新しい史料学的命を吹き込むことになるはずである。

4. 研究成果

(1) ヘルシンキ国立図書館所蔵のマンネルヘイム断片コレクションについては、断片全点の写真撮影を終えた。このコレクションについては西脇常記による簡単な目録があるが、新撮影の写真に基づいて精査したところ、それに記載されていない断片の存在や、大正新脩大蔵經の同定頁の誤りなどを見出すことができた。

(2) コペンハーゲンの王立図書館東方部の敦煌文献 14 点についてはすべて調査し、IDP で公開されているものより精緻な写真撮影に成功した。またかつて榮新江が入手できなかった、本文書入手の経緯を示す旅行記を探し出すことができ、購入場所を特定できた。「莫高窟」と書かれた奥書などいささか疑念を持たせるものもあるが基本的に敦煌文献と考えて良いと思う。

(3) ベルリン国立図書館からの疎開品で未知の敦煌・吐魯番文書の存在の可能性が斯界でかねて根強く指摘されていたポーランドのクラクフ市立図書館を調査した。フランクフルト大学(当時)の玉井達士(海外共同研究者)が、P. リッター教授(クラクフ大学)から得た情報によれば、現地に漢字研究者がいないために未整理のまま保管されているということであった。幸い担当司書の全面的な協力を得ることができ、漢文文献の全てを出納したところ、ベルリン国立図書館からの大蔵經をはじめとした大量の疎開文献の存在を確認した。これはおそらく 1916 年に刊行された KÖNIGLICHEN BIBLIOTHEK ZU BERLIN に記載されているものと同一であることを突き止めた。しかし一方で、敦煌・吐魯番文書については、当館には存在しないという結論を得ることができた。

(4) イスタンブール大学図書館所蔵吐魯番出土史料については、同図書館が改修工事のため現物の閲覧はできなかったが、管理責任者のセルトカヤ教授の協力を得て、全点の詳細なデジタル画像を入手できた。これらがすべてベルリンのコレクションと関わるものであることを確認した。

(5) サンクトペテルブルグの東洋学研究所・エルミタージュ美術館のオルデンプルグコレクションについては、東洋学研究所がロシア政府による整理事業の対象になったことから、直接のアクセスを断念し、東洋文庫架蔵のマイクロフィルムによる情報や既刊史料集による確認を行った。詳細は次の機会

を待つことになったが、西脇常記が指摘したベルリン所蔵の經典との接続は再確認できた。

(6) またこれらのコレクションの中核に位置するベルリンのコレクションの調査も同時推進した。顕著な成果としては、コレクション中に、日本古代の秋田城出土の木簡類と比較できるものが存在することを発見したことである。これによって新しい古文書学的成果を生み出す手法を考案でき、それらをまとめて学界誌に公表した。

またアジア芸術博物館所蔵史料のガラスの張り替えに際して生じた微少断片について、名古屋大学加速器質量分析計で分析したところ 7 世紀から 8 世紀という数値を得られた。断片であるゆえに、年代が記されていないことがほとんどであるから、こうした分析の有効性が確認できた。

(7) 以上のような基礎的成果を受けて、それらを統合する作業を実施した。これらのコレクション中には仏典が多数含まれる。今回調査したものはもちろん、さらに既知のコレクションの仏典情報をも加えて出土仏典全体にわたるデータベースを構築した。それに基づいてコレクションをまたぐ断片の存在を多数発見することができた。とくにヘルシンキと、ベルリンや旅順のコレクションの接続が明らかになったことは重要である。ベルリンと旅順のコレクションが発掘品を主体としていることは確かであるが、ヘルシンキのコレクションがすべて現地での購入品であることを考えると、それと接続するものも購入品であると考えざるを得ない。ベルリンと旅順のコレクションについて今後個別の検討の必要性があることを明らかにできた。その一端は学界誌で公表している。またその概要を『科研費ニュース』2013 年度 Vol. 3 でも紹介した。

なお、これまでもこうしたコレクションを越えて接続する事例については、偶然見出されたものがいくつか学界で知られていたが、今回の研究では、それを体系的に効率よく見出す新しい古文書学的手法を確立できた。今後は、これを世俗文書にまで拡大していく方法の検討に入ることが可能になった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 13 件)

① 岩本 篤志、国立国会図書館蔵敦煌文献小考、『立正大学人文科学研究所年報』、査読無、52、2015、1-17

② 片山 章雄、大谷光瑞の業績―探検隊収集将来品をめぐる、聚美、査読無、13、2014、74-78

③片山 章雄、敦煌・トゥルフアン（甘肅省・新疆ウイグル自治区）、中国出土資料学会編『地下からの贈り物』、査読無、2014、222-227

④小口 雅史、法政大学大学允史学専攻小口ゼミナール、近世最末期～明治前期（推定）における正倉院文書偽作の一事例、法政史論、査読無、41、2014、23-55

⑤關尾 史郎、「前秦建元廿（三八四）年三月高昌郡高寧縣都郷安邑里戸籍」新釈、東方学、査読有、127、2014、35-49

⑥關尾 史郎、「五胡」時代戸籍制度初探——以対敦煌・吐魯番出土漢文文書の分析為中心、中国敦煌吐魯番学会成立三十周年国際學術研討會論文集、査読無、1、2013、172-478

⑦關尾 史郎、〈後秦白雀元（384）年九月某人隨葬衣物疏〉補説、黄文弼与中瑞西北科学考查团国際學術研討會論文集、査読無、2013、150-157

⑧辛嶋 静志、Nouvelles recherches sur les manuscrits sanscrits bouddhiques provenant d'Asie Centrale, Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres (CRAI)、査読有、2012-II、2013、815-826

⑨岩本 篤志、敦煌秘笈所見印記小考—寺印・官印・藏印、内陸アジア言語の研究、査読無、28、2013、129-170

⑩岩本 篤志、大東急記念文庫蔵敦煌文献来歴小考、立正史学、査読無、114、2013、1-24

⑪小口 雅史、片山 章雄、在ヘルシンキ・マンネルヘイム断片コレクションの調査と成果概要、西北出土文献研究、査読有、11、2013、37-50

⑫小口 雅史、原 京子、トゥルフアン地域における府兵の管理方法について—在ベルリン・トゥルフアン・コレクションCh-二五六と秋田城出土木簡との比較から—、法政史学、査読有、79、2013、173-197

⑬片山 章雄、王 振芬、張 銘、旅順博物館所蔵文書と大谷文書における形状と綴合（2011年度）、土肥義和編『内陸アジア出土4～12世紀の漢語・胡語文献の整理と研究』平成23・24年度分冊、査読無、2013、7-13+図版14

〔学会発表〕（計9件）

①片山 章雄、大谷探検隊と二楽荘に関する二題（隊外の断片資料接続、陳列拓本の追跡）、

東洋文化研究会、2015年3月7日、岩波セミナールーム（東京都・千代田区）

②岩本 篤志、敦煌文献與傳存文献之間—以唐代醫藥書《新修本草》和《千金方》為中心、国際學術研討會：重繪中古中國的時代格—知識・信仰與社會的交互視覺、2014年11月9日、上海市（中国）

③關尾 史郎、從出土史料看〈教〉—自長沙吳簡到吐魯番文書、魏晉南北朝史研究的新探索—中国魏晉南北朝史学会第十一届年会暨国際學術研討會、2014年10月13日、北京市（中国）

④關尾 史郎、鄭鳳安とその契約文書—『新疆博物館新獲文書研究』によせて—、“歴史与展望：中西交通与華夏文明”国際學術研討會暨絲綢之路經濟帶高層論壇、2014年8月19日～20日、蘭州市（中国）

⑤小口 雅史、片山 章雄、在欧吐魯番出土文字資料の断片接続からみえるもの—ヘルシンキ・マンネルヘイム断片コレクションを主たる素材として—、唐代史研究会、2014年8月18日、強羅静雲荘（神奈川県・箱根町）

⑥關尾 史郎、「前秦建元廿（三八四）年三月高昌郡高寧縣都郷安邑里戸籍」とその周辺、内陸アジア出土古文献研究会例会、2013年8月3日、東洋文庫（東京都・文京区）

⑦岩本 篤志、東急記念文庫蔵敦煌文献来歴小考、立正史学会、2013年6月23日、立正大学（東京都・品川区）

⑧關尾 史郎、古代中国における墓券の展開、ボッフム大学東アジア学部主催講演会、2013年2月15日、ボッフム市（ドイツ）

⑨片山 章雄、近年扱った文書と漢籍二題—大谷文書の四神と突厥が現れる漢籍—、漢籍研究会（新年大会）、2013年1月12日、日中友好会館（東京都・文京区）

〔図書〕（計2件）

①岩本 篤志、角川学芸出版、『唐代の医藥書と敦煌文献』、2015、pp300

②玄 幸子、関西大学出版部、『内藤湖南 敦煌遺書調査記録』、2015、pp491

〔その他〕

ホームページ等

<http://aterui.i.hosei.ac.jp/oguchi/berlin/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小口 雅史 (OGUCHI, Masashi)

法政大学・文学部・教授
研究者番号：00177198

(2)研究分担者

關尾 史郎 (SEKIO, Shiro)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：70179331

片山 章雄 (KATAYAMA, Akio)
東海大学・文学部・教授
研究者番号：10224453

(3)連携研究者

辛嶋 静志 (KARASHIMA, Seishi)
創価大学・国際仏教学高等研究所・教授
研究者番号：80221894

三上 喜孝 (MIKAMI, Yoshitaka)
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号：10331290

伊藤 敏雄 (ITO, Toshio)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00184672

岩本 篤志 (IWAMOTO, Atsushi)
立正大学・文学部・専任講師
研究者番号：80324002

玄 幸子 (GEN, Yukiko)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：00282963